

南山アーカイブズニュース

Nanzan Archives News

第4号 2011年11月1日

目次

- 言葉に像(かたち)を与える……………鳥巢義文…2
《南山発見》世界が注目する学術資料……………黒沢 浩…4
《史資料紹介》ヨハネス・ボンセレット 南山高等・中学校第六代校長…會澤俊三…6
アーカイブズと展示……………永井英治…11
《史資料解説》パッチワーク・キルトの物語……………グラバア俊子…12



南山短期大学人間関係科の卒業合宿で制作したキルト（南山大学人文学部心理人間学科所蔵）

言葉に像(かたち)を与える

鳥巢義文

随分前のこと、南山大学史料室から学内教職員宛での協力要請ということで、手元の諸文書等を処分する際には自分で直接廃棄せずに、ひとまず史料室の関係文書用の受付ボックスへ投入するようにという趣旨の通知をもらったことがある。確かに毎年度あるいは内容によっては数年に一度の割合で、折を見て、職場に設置された書棚に背表紙を付けてファイル保管してある諸文書を処分している。現在の研究室に引っ越してからずっと保管され続け、その分量を徐々に増やしている文書類がある一方で、既に完結しているか、あるいは特定の事情で入室以来手つかずのままそこにある文書類もある。また直に来るであろう活用を待つ文書類もある。このようなさまざまな文書が研究用図書に交じって、スペースを奪い合うようにして置かれている。どの文書も特定の目的を持って作られているのであるが、あの会議のため、この研究のためといった特定の目的のために作成された文書は、当初の目的が達成されると用済みとなる。いや用済みというよりも、構想のさらなる展開のために用意される文書へとバトンを渡して自分の役割を終えたということであろう。しかし、文書の中にはこのような過程を短期間のうちに辿ることのできないものも多くある。これらは断片的であるゆえに、背表紙付きのファイルに綴じられる以前の段階でクリップ留めされて机上に積まれるか、簡易ボックスや机の引き出しの中に一時保存されている構想のメモ書きや未完成文書である。これらが日の目を見るという保証はないし、いつの間にか文書作成者自身の記憶からも消え去っているかもしれない。いずれにしても、このような中継ぎ役の文書類にもそれなりの価値があるというのが史料室の受

付用ボックスに込められた意味なのであろう。あまり上手い譬えではないかもしれないが、野球やサッカーなどのスポーツが頭に浮かぶ。シーズン優勝を決める記録として留められるのは勝敗等の試合結果である。だが、それぞれの試合を観戦する人々の心と目を奪っているのは、例えば野球の中継ぎ投手の活躍であったり、サッカーのゴールを決めた選手に絶妙なボールをパスした選手のテクニックであったりするのではなかろうか。また、試合に感動した観客の尺度が、試合を振り返り自己分析する選手の尺度と異なる場合もあるだろう。同様に、文章の種類にもよるが、作品の作者と読者の解釈の相違のゆえに当の作者の予想を超えた反響を生むようなケースは少なくない。逆もまた然りである。もしかしたら、史料室の文書受付ボックスは、執筆者自身にさえ忘れ去られている文書に光をあて、さまざまな角度からまたはさまざまな文脈において、新たに文書を輝かせるために用意された「宝の箱」なのかもしれない。

そこで、職場での研究室の移動や課室の引っ越しは、目立たずに保存されていた文書類の再発見ないし活性化の機会となることもあるというのが実感である。ただし、これが個人レベルでなく、大きな単位での引っ越しとなると、そこで扱われる文書の量も半端ではなくなる。2011年の春、南山短期大学は40数年を過ごした名古屋市昭和区隼人町のキャンパスから同区山里町の南山大学名古屋キャンパスへ校舎を移転し、南山大学短期大学部と名称を変更して新たなスタートを切った。大学キャンパスでは、短大部に在籍する学生にしてみれば海外からの留学生と交流する機会が国内にしながらにして一挙に増えることとなった。これまで

実践的英語能力の教育に定評のあった南短英語科である。教育者側にとっても、この環境は南短の教育内容をより魅力的にするための一つのチャレンジとも考えられよう。また、大学キャンパスの既存の諸学部との教育連携の可能性も広がっている。まだ移転して半年が過ぎたところである。新天地にふさわしいカリキュラムはこれからもう少し時間をかけ、さまざまな試行錯誤を重ねることを経て形成されていくものと思われる。これまで培った教育ノウハウの蓄積を新しい教育環境の中で、一層、南短らしいユニークな発想で磨き上げていかれることを期待している。ところで、私自身は2008年の春から3年間、隼人町のキャンパスで南山短期大学の学長職を仰せつかった。隣接する南山教会で行われた最後の卒業式を終えて、短大の学長室や研究室で使用した個人的な書籍や文書類を大学の研究室へ移すことになった。数日間かけてあれこれと思い出に浸りながら箱詰めしたところ、運送業者の用意してくれた段ボール箱で10箱ほどになった。一方、短大の各課室では、事務職員が進行中の教育研究に関連する文書類から優先的に大学キャンパス内の関連課室へと移動し、新年度からのスムーズな業務運営に対応できるようにした。その際に、保管すべき文書類や記録類をまとめてもらったところ、史料室宛ての段ボール箱が200箱を超え、改めて1968年の南短開学以来の40年を超える歴史の重みを見た思いがした。

さて、私は本年度から学園史料委員会に係わることになった。そこで、紙面をお借りして「言葉の像(かたち)」ということについて記してみたい。旧約聖書の創世記には人間創造の物語がある。短く引いてみる。「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。』……神は自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。」(1章26節－27節。)ここから、キリスト教神学では人を「神の似姿」また「神の像」と呼ぶようになった。これはラテン語訳聖書にはImago Deiと表記されている。もっとも、この個所に、万物を創造した神自身が地上の人間と同じ姿かたちを持っているということが暗示されているというように気を回す必要はない。むしろ肝心

なのは、この「似姿」また「像」という表現によって、人に与えられている知性と自由の恵みが神の本性につながっていることが物語られていると把握することである。このImagoという言葉について、紀元2世紀にリヨンで活動したエイレナイオスは次のように解釈している。創世記のImago Deiによって本来的に指示されているのは、「神の御子自身」である。新約聖書ヨハネ福音書の受肉の神学に描かれているように、御子が地上に降って人となったことによって人々は神の「真の像」を見ることになった。そして同時に、人々自身も自分が「御子の像に似たもの」として創造されていることが明らかにされた。つまり、人が神の像であるのは、人が「神の御子の像」であるという意味においてであるというのである。その後、紀元4世紀にミラノで活動したアンブロジウスは、ヨハネ福音書の冒頭で御子が「神のみことば」(Verbum Dei)と呼ばれていることに強いインスピレーションを受けた。そして、エイレナイオスに既に見られた「御子の像」である人間を「みことばの像」(Imago Verbi) また「キリストの像」(Imago Christi)として解釈し、人々は「みことば」また「キリスト」の像にふさわしい倫理的生活を営むべきであると説いた。

今、このImago Verbiを応用してみたい。ただし、ここでは神の「みことば」(Verbum)を私たちの日常的言語としての「言葉」(verbum)に置き換えて考えてみたい。そうすると、先に示した「言葉の像」という表現が出てくる。私たちが会話し合う時の発音された言葉も、文書を作成する時に綴られた言葉も、それを行う私たちの内にある気持ちや思い、また心を、相手に伝えるためにいわば「かたち」にしているのである。1日の間に、私たちはどれだけの言葉を生み出しているだろうか。書かれた言葉すなわち文書に限ってみても、自ら書かなくとも大量の文書を目にする毎日を送っているのが私たちの現実である。こう思いめぐらしてみると、私には「宝の箱」に入れる文書に綴る自分の言葉への責任というか、言葉に「像」(かたち)を与えることの重みを再確認させられる気がする。

(南山学園史料委員会委員長)

世界が注目する学術資料

黒沢 浩

南山大学の名古屋キャンパスで、ログスセンターの西側の小径を入って突き当たったところに、あまり人の出入りが見られない施設がある。よく見ると、入り口には大きな常滑焼の甕があり、その上には「開館中」という看板がある。さらに入り口の扉の上には「南山大学人類学博物館」の文字が見えるだろう。そう、これが人類学博物館なのである。そのたたずまいは実にひっそりとしており、学内でもその存在を知らない人はけっこう多い。

しかし、そこには考古学・人類学・民俗学などの専門的な教育や研究に欠くことのできない貴重な資料が展示され、公開されているのである。それがどれくらい貴重なものであるかは、どれだけ他の博物館や研究者たちが人類学博物館所蔵資料に注目しているかをみればわかるだろう。

何と言っても第一に紹介したいのは、茨城県花輪台貝塚から出土した縄文早期の土偶である。この土偶、大きさはわずか5cm程度で、頭部と手、そして乳房の表現があることから、かろうじて人型と判断できるほど簡素なものである。それがなぜ貴重かといえば、この土偶は日本で最も古い土偶の一つであり、そのことから、2009年にはあの大英博物館で開催された『Power of DOGU』展に出品されたからである。実際のところ、現在は「最も古い」という地位は失ってしまったが、それでも日本の考古学において重要性が変わるわけではない。

この土偶は、今も第一展示室の一隅に展示されているが、言われなければ誰も気がつかないかもしれない。それほどにその土偶は小さく、目立たない。そんなささやかな遺物が、海を渡り、世界一の博物館である大英博物館で展示されたのであ



花輪台貝塚出土土偶

る。いささか大げさにいえば、世界が南山大学人類学博物館の所蔵資料に注目したのである。

花輪台貝塚の土偶がある第一展示室には、そのほかにもたくさんの縄文土器や弥生土器が並んでいるが、花輪台の土偶のちょうど対面にある壁面のケースに、錆びた甲冑や金色の銅板を使った馬具が展示されている。これらは現在の名古屋スポーツセンターの場所にあった大須二子山古墳という100mを超える前方後円墳から出土した遺物である。古墳自体は戦後の道路の拡幅工事、大須球場の建設、そして名古屋スポーツセンターの建設によって完全に消滅してしまったが、その出土品は工事関係者や地元の郷土史家らによって丹念に採集され、今日、人類学博物館と、一部が名古屋市博物館に収蔵されている。

この古墳が造られたのは6世紀のこととされ、近畿では継体大王が王位についた時代である。継体の擁立には当時の有力豪族のひとつである尾張氏がかかわったとされており、その中心にいた人物である尾張連草香の墓は熱田にある断夫山古墳であると考えられている。大須二子山古墳もそうした一族の墓の一つなのかもしれない。出土品はそれにふさわしく、甲冑・馬具・鏡などがあり、いずれも同時代の古墳からの出土



大須二子山古墳出土馬具

品としては優秀な製品ばかりである。そのことから、2009年には名古屋市の文化財に指定された。

2010年には、大阪府の近つ飛鳥博物館が『継体大王の時代』という特別展を開催したが、その展覧会の中でも、継体擁立にかかわった東海の豪族の古墳として紹介され、資料が展示されたのである。

これまでは考古資料ばかり取り上げてきたが、民族資料にも優れた資料がある。現在人類学博物館で展示している民族資料は、上智大学の調査団が収集したタイ北部山地民に関する資料と、南山大学が調査し、また神言会の神父によって収集されたパプアニューギニアの資料の2件である。

特に今、研究者が注目しているのは、タイ北部山地民の資料の中でもヤオ族(ユーミエン)がもっていた「評皇券牒」と呼ばれる通行手形と、同じくヤオ族が儀礼で用いる「十八神像」であろうか。「評皇券牒」とは、もともと雲南地方に居住しながら、焼畑農耕を営みながら移動をしていたヤオ族が、中国の皇帝から国境を越えての移動を認めてもらった証拠として伝えられてきたものであり、漢字で書かれている。手形と言いながらも、長さは何と6mにもなる長大な巻物である。

また、「十八神象」はヤオ族の伝統的な宗教儀礼で用いられるもので、道教の「大堂神」という一組の神々を十八枚の画像として描いたものである。いずれも、日本には数が少なく、今日のタイにおいても貴重な資料とされているものである。



ヤオ族の評皇券牒(部分)

これらの資料は、2010年に国立歴史民俗博物館と国立民族学博物館とによる連携展示『アジアの境界を越えて』という特別展に出品され、それ以来、東南アジアの山地民を研究する人たちが調査に訪れるようになった。

このように、大学の中でも人の出入りの少ない一角に、こんなにも注目されている資料がある。博物館の場合、「人知れず」は決して良いことではない。博物館資料は活用されてなんぼ、なのである。

もともと、人類学博物館は学外では有名だが、学内ではほとんど知られていないという不思議な存在であった。しかし、ここに紹介したように、その優れた学術的価値のゆえに、多くの専門家たちの注目を常に浴びてきたのである。

最後に、今後の人類学博物館の予定をお知らせしておきたい。2011年度には東京の明治大学博物館において、明治大学との連携事業の一環として、人類学博物館所蔵資料の一部が展示される。また、2012年度には、同じ事業として、名古屋市博物館、明治大学博物館、そして人類学博物館の3者合同の展覧会『驚きの博物館コレクションー時を超え世界を駆ける好奇心』が開催されることになっている。

そして、2013年、いよいよ人類学博物館がリニューアルオープンする。そのため、前年の5月には、一時閉館することになるが、しばしお待ちいただきたい。それは、新しい博物館において、これらの資料がもっともっと注目され、研究され、活用されることを願っての準備なのだから。

(南山大学人文学部人類文化学科准教授)

史 資 料 紹 介

ヨハネス・ポンセレット 南山高等・中学校 第六代校長

會澤俊三 編

ヨハネス・ポンセレットJohannes PONZELET
校長関連の34程の文章が『南山ハイスクール新聞』
『南山常盤会会報』『南山高等・中学校四十年史』に
散見される。本稿では、ポンセレット自身、教員、
生徒による6編の文章を、略歴に添って編集した。
本稿の行間を読み、さらに史料室所蔵の他の文章も
追躡されて、ポンセレット校長の指針と人柄、その
業績などの理解を深められることを期待したい。

ヨハネス・ポンセレット略歴(1)

1902年7月22日、ドイツ、Süchtelnに生れる

1922年9月1日、神言修道会に入会

1922年9月7日、修練期開始

1923年9月29日、初誓願宣立

1926年9月29日、永久誓願宣立

1927年5月26日、司祭叙階



私の少年時代
ポンセレット校長の巻

私の少年時代

ポンセレット校長の巻

ライン川の西のオランダの
国境に近いスイシテレンに生
れた。……〔四年制の・編者注〕
小学校は家から5分程の場所
にあり、朝4時間(8-12)、昼
から2時間だった。昼は……
食事をたべに家へ帰った。
……中学は1学年20人程で非

常に家庭的雰囲気か漂っていた。

中3の時に第一次欧州大戦が始まり先生が出征した

りして満足な授業が出来なかった。大戦などの苦労
はあったが中学の時も1年のころは楽しく、夏休みには
友10名程と朝早くからオランダへ行くこともあった。
国境までは20キロ位でスタイリーというところの
神言会の教会や博物館などを見てまわり……オラン
ダとドイツの言葉は大差なく訛がにているので困ら
ない。

……中学では理、国、数の外、第二外国語は1年か
らはラテン語、3年からはフランス語それに4年にギ
リシャ語を……高校に入る時ヘブライ語をやった…
…聖書の原本をよむため結局このあたりから神父
になろうかと思いだした。

父が、ライファイソン銀行(貧しい農家や小さな実
業に融資する銀行)を経営していて、また大層な信心
家で朝は毎日ミサを欠かさず、夕方には食後に毎日
祈っていた。このことなども影響はしているでしょうが、
神の召出しとわれわれは考えますこんな、気持もち
ながら高校に入ったが高校では勤労準仕にフランス
の北の方まで遠征した。ちょうど1918年のことです。
高校時代スポーツは好んでバレー・ボールと……シュ
ラーク・ボール……をした。



高等学校生時代 ○印がポンセレット

……1921年に高校を出てボン大学哲学科に入学その2年に外国布教を思い立ち、神言会に入った。この時にあのフラッテン神父にあったのである……その時のワンダフォーゲルは……若人の運動だった。大自然の中を歩きまわり、地理、歴史的遺跡などを知り、風俗習慣を理解して、自分の国を知るのに、大層役に立った。夏休みなどになると、グループで幾週間も歩いて夜はわら小屋や学生宿にとまったアルプスにのぼったのが最も記憶にのこっている。……(『南山ハイスクール新聞』第34号2面、1953年5月20日)

ヨハネス・ボンセレット略歴(2)

1927年9月19日、来日
金沢教会を経て、新潟
教会で日本語習得

1928年、新潟県佐渡郡
相川町、相川教会助任

1930年、新潟県佐渡郡
両津町、両津教会助任

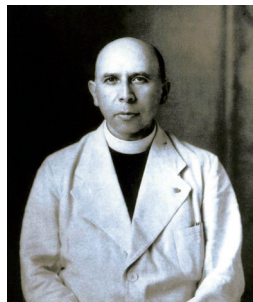
1934年～1940年、新潟市、新潟教会主任

1940年～1947年、神言修道会日本管区長

36歳の若年で1939年12月、神言会日本管区長任命の辞令を受領、翌年2月に多治見本部修道院に着任。時局の外国人排斥・拘束・監視と財務逼迫・教会施設の焼失など、太平洋戦争下での苦難の神言会管区を統括し、1945年8月28日、多治見修道院で南山学園創立者ライネルスの最期を看取った。

1945年～1959年、学校法人南山学園理事
ライネルス歿後の後任理事に就任。終戦後の神言修道会諸活動方針の設定と南山学園教育の復興に挺身した。

1947年9月、ローマでの神言修道会総会出席
松岡孫四郎教区長・理事長からボンセレット管区長への緊要建議であった名古屋教区経営の財団法人南山中学校負債問題と経営移譲問題を携えて神言修道会総会に出席、新総会長グローセ・カッペン



ベルグは南山学園の経営を、その負債とともに名古屋教区から神言修道会に移譲引受けることを裁可した。

1948年～1950年、東京、聖アルベルト・ホーム(修道院・研究所)修院長。

1950年～1958年、南山高等学校・中学校校長

1949年に南山大学、1950年には南山大学付属南山第二高等学校が設置され、アロイジオ・パッヘが学長と学園長を兼務。同年8月15日にヨハネス・ボンセレットが名古屋の南山高等・中学校の専任校長に就任した。

南山昔と今⑨

一藤季雄

……

ボンセレット神父をむかえて、高、中に久し振りに専任の校長ができた。……神言会管区長をすでに二期間つづけて……神言会の長老、また南山中学校の理事でいられたから学校とも縁のある方である。高、中関係者は本当によろこんだ。就任式に生徒代表から歓迎の挨拶のあと「私は皆さん方の顔を見て、これだけ大勢の皆さんの教育に責任を持たねばならぬのかと思うと、少し心細くなってきた」といわれた。如何にもボンセレット先生らしい誠実なご挨拶だった。校長はずっとあとで、校長の仕事は経験がなかったが、やって見て、これが私の性質にもっともよく適していることがわかり、神様から与えられた職として感謝しているといわれた。校長先生の人格は生徒に一番よくわかったらしい。生徒は皆校長先生を親愛するようになった。(男子、女子も)なごやかなふんい気が学校にみなぎり、何となしに安心感ができてきたと思う。決してハデなタイプの方ではなかったが、わからぬ所は、何でもよく研究し、困難を恐れず解決しようとする人柄が誰にも感受された。ライネルス先生によく似たふんい気をもっておられた。人徳というものだろう。……(『南山常盤会会報』第9号、1970年3月)

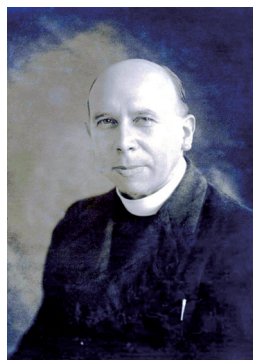
南山精神を持った人格者を

— 創立20周年に当って —

ポンセレット校長 語る

……私達はまづ天主様に感謝しなければなりません。……ライネルス先生は昭和20年8月20日の御臨終の時まで学校のために心配し続けてこの世を去られました。20年間といえば学校の命としては短いかも知れませんが、その始めの20年間は創立当時の多くの困難、苦労、犠牲を含んでいますので若い人々の発育期と同じように大切な20年間であります。

第二次世界大戦は学校に大きなショックを与え、その困難な時代に校舎も大部分焼けまた終戦後の全国的な思想の荒波の時代を通り抜けて来ました。しかし終戦と共に新しい力をもって蘇えり、あらゆる苦しみに耐えて現在は今までのどの時期よりも堅固な土台の上に立っています。



そこで現在の在校生の皆さんに望みたいことは南山の精神を持ったしっかりした人格者になれることです。人格者になるとは深い犠牲心と克己心を持つ事です。この犠牲心は南山の始めからあるもので、今日まで南山の中に生き、その命を伝えているものがあります。普通に何かの教育事業、社会事業の始められる時には、大きな財産家が基本金を寄付して創立するのです。しかし、南山はそうではなく、ライネルス先生の活躍によってヨーロッパとアメリカの多くの人々、しかも大部分は貧しい人々の本当の犠牲的寄付金によって建てられたのであります。ですから南山にあつては、それを建てた資本は、全くライネルス先生をはじめ多くの人々の犠牲心だというわけです。ここに源を発する南山精神、己に克つ自分の我儘を犠牲にするという精神を以て在学生の皆さんは進まねばならないと思います。立派な人格者となることは犠牲心と克己心を土台とし、社会生活に役立つ、しっかりした人となるためにも、やはりこれが必要でありましょう。

人に親切をつくすという一つのことでも、この犠牲

心と克己心がなければ本当の親切、心からの隣人愛にはなりません。他のすべての事についても同じことがいわれましょう。この優れた精神をもつためには、南山の生徒は第一にその学生としての本分をつくし、日々真面目に勉学につとめ、学校、家庭その他何処においても、何時も規律正しい生活をする態度をとるようにせねばなりません。

学校のはじめの20年間は発育期で、これから青年期が始まります。ライネルス先生はじめ多くの人々の尽力のあとを受継いで、その精神を採入れ、さらに明るい正しい校風を築いてゆく責任は、現在の在校生たる皆さんの双肩にかかっています。在校生の皆さんが、南山の精神をしっかり身につけて、それをあとの時代に伝えて下さることを期待しております。(『南山ハイスクール新聞』第30号、1952年11月1日)

生徒会の一記録

高嶺 昌

……[ポンセレット・編者注]師は真に温かく私共を指導して下さい。……一例を挙げると、生徒総会を開く。総会が開会され、生徒会長が議長となって討議がすすめられ、やっと結論が出る。その間、校長は静かに傍聴していらっしゃる。閉会后、生徒会長が議事録に従って作成した要請書を校長宛に提出する。翌週月曜日の全校生徒が集合した朝礼の際、その要請書を手し、その一件一件につきていねいに説明され、学校側の見解を話される。また、その後で再度生徒会から要請があれば、生徒会の議会までわざわざ来室されて話される。そこには生徒自治と学校(教師)との関係が実に円滑に保たれていた。私は中学生徒会長の時、ポンセレット校長を迎え、高校生徒会長として20周年記念行事にうち込むまでの4年間をふりかえって、この名校長の下で、その御指導を与えられた幸せを心から感謝している。20周年の時はその用意のために深夜まで生徒会室でその仕事をしたが、後日、ポ校長は夜の散歩の際、窓に電燈が映っているのを遠くから見られたのであろう、あまり遅くなると身体に悪いとある人を通じて心配されたことを聞き、恐縮したものである。そういえば、生徒会

に独立した生徒会室を与えて下さったのも同校長であった。当時、生徒会には謄写版の道具も、物置きも、ましてや部屋などなかった。同校長が……戸棚から椅子に至るまで備品を用意して下さった。(『南山高等・中学校四十年史』359-360頁、1974年)

ヨハネス・ボンセレット略歴(3)

1959年4月、東京、麹町神言会修道院で病氣静養

1960年3月11日、手術療養のため帰独

1960年3月29日、ボン大学付属病院で脳手術

1960年4月4日、心臓栓塞症で逝去57歳

天使が旅に出るので雨が降る

横尾一夫

……本当に澄み切った温かいまなこを神父様はもっておられた。……

校長になられてから、病氣は目に見えて進んだように思われる、学校をおやめになる頃には万年筆も満足にお使いになれないほどだった。また、朝礼の訓話の最中に軽いめまいを起こされ、前のマイクの支柱をつかまれたことがあり、見ているわれわれが思わずハッとしたこともあった。そんなときにも澄んだまなこには微笑をたたえられ、何の苦痛ももらされなかった。病氣との戦いの苦しい毎日であったはずなのに、健康な人でもできないほど、心も身もすべてを教育に投ぜられ、今日の南山を築き上げられたお姿に今更ながら感謝と尊敬の念を抱かざるをえない。羽田で見送った私達をじっと見つめて下さったその温かいまなこがこの世の最後になろうとは…



1960年3月11日 羽田空港での見送り

3月11日の羽田は昼頃、曇りから急にひどい土砂降りになってしまった。神父様の出発を悲しむ空としか思えなかった。雨の中をスチュアデスのさす傘に守られ、タラップを上られる姿が弱々しかった。日本を離れるのが本当に辛かったのではないだろうか。あるいはこれが最後になるかも知れないという不安を心に抱かれていたのではあるまいか。入口でふりかえられて手を振られ機上の人となってしまわれるといような寂しさに私達はつまれた。冷たい雨がそうさせたのかも知れないが、もうお会いできないという暗い予感がどうふり私おうとしても頭から離れなかった。エプロンを出てゆく飛行機の小窓からの白いハンケチに一生懸命お別れの手を振ったが、それもつかの間、無情にも我われは神父様と分離されてしまった。しばらくして激しい爆音と共に飛び立った神父様の機はたちまち灰色の空に姿を消してしまった。言いようのない虚無感。ぼんやりとロビーを抜けて外に出るとやがてあんなに降っていた雨はやんでしまった。後日ボルド校長が「ドイツでは誰かが旅に出るとき雨が降ると“天使が旅に出るので空が泣く”という」と言われたが、本当にそうだったと思った。

始業式の朝、神父様の悲報を聞いて、全身から血の引く思いだった。いまわしい予感がこんなに早く現実になろうとは…。誤報であってほしいと願わずにはいられなかった。しかし8日の追悼ミサに……祭壇の前に飾られた神父様の写真を見ながら思った。この神父様が天国に既に迎えられていないはずはないと。私はやっと安心した。

……私達に……「学校ほど大きな仕事はありません。ますます先生方に協方していただいて生徒達を導かれるよう心から祈ります」といわれた最後の言葉を思い出した。神父様は天国から私達の学校をきっと見守って下さっているにちがいない。……神父様と私達は一体なのだ、と私は信ずる。神父様の死によって私達はより一層大きな力を得たのだ。

今こそ南山は重大なときだと思う。先生も生徒も父兄も卒業生も一体となって、まことの教育の園を築き上げていくことこそボンセレット神父様と共に歩むみちだと信ずる。希望にもえて頑張ろう。(『南山ハイスクール新聞』第87号、1960年4月25日)

ボンセレット神父を想う

アルベルト・ボルト

私が、ボンセレット神父様に、始めて会ったのは、25年前の新潟教会でした。神父様は、丁度1年前、新潟教会の主任司祭になられた所でした。新潟教会は、その当時、東北で一番大きな教会であったと思います。私は、その時まだ理想にもえる若い修道者でしたので、丁度ボンセレット神父様の下で務めることが出来たのを非常に幸いに思いました。

神父様は修道者としても極めて、質素な生活をされ、私は少しもスポイルされることなく、修道者の清貧を、その通りに守ることが出来ました。その時から数年後、時代は大変苦しくなって来、……1ヶ月、12、3円で生活したという憶えがあります。

神父様の所有物は非常に少なく財産と云えば唯、2つ位の箱でした。私もあまり多くはなかったのですが、神父様のと比べると、時々恥ずかしく思った位です。神父様は、私に対して非常に忍耐強く、私を指導して下さいました。難しい仕事は全部自分でされ、私には易しい仕事ばかりをさせて下さいました。

その時から、神父様の生活の一つの法則は「秩序を守れ、そうすれば秩序が貴方を守るでしょう」という言葉であったと、痛切に感じました。

神父様の部屋は、いつも、きちんと整頓されていました。神父様は、その時から、日本語が大変上手でした。私はその流暢さに感心していました。私の聞いたところでは、少しも間違いのない様に思われたのですが、或日曜日のこと神父様は、説教の時、信者に霊的読書を奨めようとして「霊的ショックドウをしなさい」と繰り返しました。これも、信者にとっては意味があったと思うのですが――。

もうその時から、神父様の健康状態はすぐれませんでした。神父様は心臓脚気に悩んでおられた。数分間、立って説教された時等、あとで目まいを覚えて机や椅子に、よりかかって、しばらくじっとしておられる様な事が、たびたびありました。又、よく一緒に歩きましたが、特に道や広場を横切る時には、私はいつも神父様を支える様にして歩くようにしていました。これで神父様は、いくらか安心感を持た

れた様でした。当時、教会に務めている人達の生活は、あまり保障されていませんでした。そこで神父様は「何かしなければならぬ。教会が社会正義を唱えながら、正義が守られないのはおかしい、正義を守らなければ」と、よくおっしゃって、教会に務めている人の生活を、よく心配されていました。

それから数年後たつた1940年、神父様は、管区長になり、……戦争中本当に苦勞なされた。戦時中の政治的、経済的事情は、外人の宣教師にとって、非常にみじめなものでした。けれども、神父様は、あまり大きな事故も経験れずに、^{〔さ脱力〕} 神言会をよく指導されました。

学校の業績については、此処で私が云々しなくても、皆さんがよく御存知のことと思います。先生方や生徒の皆さんは、神父様の社会正義感を、よく体験されたわけなのです。神父様が日本を去られる時に、この30年間程の日本での仕事の中でもっとも心に残っている仕事は「何んでしたか」と尋ねた時、神父様は、即座に“南山学校です”と答えられた。彼は、学校を彼の生命の一部分だと感じておられた。



1960年4月8日 ボンセレット前校長追悼ミサ

神の御摂理であったのだろうけれども、唯、人間にとって、皮肉に思えるのは、神父様が一生、人を愛し、人をよく助ける精神にもえていたにも拘らず、亡くなった時は、誰も傍らに居らず唯独りであったということです。神父様が羽田飛行場で、私に「学校のために、よく祈ります」と約束されたことが、今、私の心にはっきりと残っています。この精神でもって立派に、生命も神に捧げられたことと思います。私にとっては、神父様は、模範的な修道者であり、司祭でありました。(『南山ハイスクール新聞』第87号、1960年4月25日)

(南山学園史料委員会委員)

アーカイブズと展示

永井英治

近年、大学アーカイブズによる展示が、いくつかの大学で見られる。大学に限らず、アーカイブズが展示を行なう意義はどこに認められるのであろうか。

アーカイブズは資料を整理・保管・公開する。この基本がなければ、アーカイブズは機能を果たしているとは言い難い。では、何のためにアーカイブズは公開されるのか。利用されるために、という即物的？回答は、案外本質を突いているかもしれない。

「利用」とは、とにかく利用できればよいというものではない。アーカイブズで資料を適切に整理・保管し、利用しやすくするためには、対象となる資料についての調査研究は欠かせない。資料についての理解が深化し、資料の本来の姿が明らかになれば、整理・保管の方法もそれに合わせて改善される。こうして、調査研究の成果は利用者に還元される。また、その成果が論文という形を取る場合もあれば、利用者からの相談に応える中で提供されることもある。展示は、このような調査・研究の成果を提供する一形態に位置付けることができる。

一方で、アーカイブズにおける展示には、広報活動としての機能がある。公文書管理法が施行されても、アーカイブズの必要性についての理解はなお浸透しているとは言い難い。このような現状では、アーカイブズは、自らの業務について自ら説明し、理解を獲得しなければならない。このため、アーカイブズでの展示では、アーカイブズの活動そのものが展示のテーマとなる。博物館でも、近年ではバックヤードの公開を展示に組み込むところや、資料の修復・保存を展示するところが現れている。このような理由に加えて、南山学園に限らず、多くの学校組織では、それぞれの学校に関する史料を

卒業生や旧職員から提供してもらい、収集に努めなければならないという事情がある。これは、組織自らが史料を積極的に保存してこなかったためであるから、けっしてほめられたものではない。

ところが、自分の手元にある、その人にとっては見慣れたものを史料として提供してよいか、ためらう人は少なくないらしい。その人にとってみれば珍しくも何ともないからであるが、そのような史料こそ貴重というケースは実は少なくない。

ありふれたものは、誰もがありふれたものと考えから、廃棄されることが多い。その結果、ありふれたものが、ほとんど残っていないということになる。このことを実感してもらうには、実際に保管されている史料を見てもらうことが一番の近道である。つまりそれが展示ということになる。その結果、自分のところにある「ありふれた」ものが貴重な史料であることが理解され、そしてそれが寄贈されれば収蔵資料は充実していくことになる。展示が史料の収集活動を促進するのである。

こうして新たに収集され、展示された史料を見学した卒業生が、在学していた時代を懐かしく思い出す場所があれば、卒業生も母校に「帰って」来やすくなる。あるいは、そこに展示された史料を見て、自分のところにはこんなものがあるということになれば、さらに史料収集の可能性が広がることになる。その結果、豊かな展示を、卒業生や在学生だけでなく、未来の学生・生徒・児童にも見せることが可能になる。

学校のアーカイブズが展示を行なうことの効用は思いのほか期待できる。

(南山大学史料室)

パッチワーク・キルトの物語

グラバア俊子

表紙のキルトのお話をさせて下さい。それは1973年に創設され、2000年に南山大学・教育学科と共に心理人間学科を立ち上げることになった、南山短期大学・人間関係科(以下人関)の物語でもあります。人関は28期生までいますが、このキルトは11期生が1985年の卒業合宿で制作したものです。

人関は、1970年代の大学教育に対する問いかけという時代の潮流の中で、それに答えようという使命感と熱意から生まれたといえます。「人間の尊厳のために」というモットーのもと、それを実現すべく＜教育の冒険＞を標榜し、多くのユニークな教育を試みてきました。そこでの人間関係教育と体験学習の導入は「学生の一個の人格としての成長過程に焦点をあてた、教育の人間化をめざすひとつの教育実践」(グラバア俊子・中野清「大学教育における体験学習の未来」『人間関係研究』第10号、2011年3月)といえましょう。

このキルトが創られた過程に、人関教育の一端が見えてきます。100名の学生は、卒業までに異なったテーマを持った6日間の合宿に4、5回行き

ます。教員も全員参加です。100+αの異なった個性との濃い係わりの中に放り込まれるわけです。そこでは四苦八苦しながらも、人はみな違うこと、その違いが豊かさであることを、身をもって学ぶ学生が多いのです。こうした学びを生み出す、学生・教員を含めた学習共同体を大切にしています。その絆は今もしっかり結ばれています。

卒業合宿は学びの総仕上げとして、学生が主体的に立案・運営・実施します。このキルトは、一人の学生の発案を尊重し、主のプログラムに加え、学生全員が一ピースを用意し、有志が合宿の夜なべ仕事として仕上げたものです。教員のピースもあり、平和と希望、学問の神の使いであるフクロウ、愛、道化師などが表現されています。提案した卒業生に話を聞くと、この夜なべの針仕事に會澤教授がずっと付き合っ下さり、ご自分のことなど話して下さったのが、とても嬉しく素敵な思い出になっているとのことでした。

こうした作品は、体験学習で主に使っていた教室に飾られ、学生の存在が刻まれると共に、人関の歴史として学びが積み上げられていったのです。

(南山大学人文学部心理人間学科教授)

南山アーカイブズニュース 第4号

Nanzan Archives News

発行日 2011年11月1日

編集 南山大学史料室

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

発行 南山学園史料委員会

〒466-0838 名古屋市昭和区五軒家町6

印刷 株式会社 For Ability

〒460-0007 名古屋市中区新栄2-29-12